

王陽明の「自得」について

著者	志賀 一郎
雑誌名	漢文學會々報
巻	28
ページ	1-12
発行年	1969-09-20
URL	http://doi.org/10.15068/00149106

王陽明の「自得」について

志賀 一朗

序

王陽明の學問は、一言にしていえば「自得」の學であるといえる。「自得」とは、自らの修行によって人生を體認することである。すなわち、自らの手によって自分の生き方を悟り、運命を切り開いて行く人生哲學である。

しかし、人間は、初めからそうあるのではない。それは何かに動機づけられ、それを契期として、自らのものとなり形成されていく。私はこれを、王陽明の人生に如實に見る。

王陽明は、三十四歳の時、初めて湛甘泉に出會った。これはまことに偶然であつたが、王陽明の一生を支配した。したがって、湛甘泉との出會いがなかったら、あの「心即理說」「知行合一說」「致良知說」「萬物一體論」など、打ち立てられなかったであらう。

それでは、どうして王陽明が湛甘泉に出會ったことが、「自得」を體認する契期になったのであらうか。そしてどのようにして「自得」し、それを弟子たちに教育したのであらうか、次の順序にしたがつて述べてみたいと思う。

- 一 「自得」の傳承
- 二 王陽明の「自得」
- 三 王陽明の子弟教育
- 四 結論

一、「自得」の傳承

「自得」を述べるには、まず湛甘泉の恩師陳白沙から始めなければならぬ。

陳白沙は名を獻章、字を公甫といい、性もつとも石を愛し、石齋と號した。廣東新會縣白沙里の人、ゆえに白沙先生という。明の宣德三年（四三）に生まれ、孝宗の弘治十三年（二五〇）、七十三歳で没した。

英宗の正統十二年（一四七）、郷試にあげられたが、翌十三年の會試には下第した。代宗の景泰二年（一五三）、再び會試に應じたが、また失敗し、景泰五年（一五三）、年二十七歳の時、吳興弼（康齋）に従つて學ぶ。吳興弼は明代の名儒、劉基・宋濂・方孝孺・薛敬軒らと並び稱せられ、その門下には、陳白沙の外、胡敬齋・婁一齋な

どが輩出した。

ここで自らを激勵し、學業に奮發した結果、益を得ることが多かつたが、居ること半年で歸り、二度と行かなかつた。時に朱英が陳白沙を參議に薦め、廬に行つて會うことを求めたが、遂に避けて會わず、戸を閉じ書を読み、天下古今の典籍をことごとく讀破した。そのかたわら、釋老稗官小説にまで及んだ。夜は寢ず、眠けを催すと、水に足をひたしたという。そして嘆いて、

夫學貴乎自得也。自得之、然後博之以典籍、則典籍之言、我之言也。否則典籍自典籍、而我自我也。(白沙子全集)

といった。遂に一臺を築き、陽春臺と名づけ、その中に「靜坐」し、數年戸外に出なかつた。

憲宗の成化二年(一四六〇)、再び太學に遊び、祭酒邢讓が陳白沙の詩を見、大いに驚き、「眞儒また出づ。」となした。時の名士羅倫・章懋・莊永・賀欽ら皆從遊した。三年春、南歸し、五年(一四六四)會試に應じたが、また下第する。十八年(一四八二)布政使彭韶および廣東總督朱英が、こもこも薦め北京に招き、吏部に就かせようとしたが、辭退して赴かず、「乞終養老母」を上疏する。そこで翰林院檢討を授けられる。その後しばしば薦められたが任に就かず没する。著書に「白沙子全集」がある。

以上、陳白沙の略歴を述べたが、これによつてわかることは、陳白沙は遂に會試に合格しなかつたこと、幾度か出仕を薦められたが、辭退して受けなかつたこと、そして「學貴乎自得也。」を體認されたことである。

それでは、陳白沙の「自得」とは何か。それは「靜坐」である。

僕才不逮人。年二十七、始發憤從吳聘君(興弼)學。其於古聖

賢垂訓之書、蓋無所不講。然未知入處。比歸、白沙、杜門不出。專求所以用力之方。既無師友指引。惟日靠書冊尋之。忘寢忘食。如是者累年、而卒未得焉。所謂未得、謂吾此心與此理、未有湊泊、脗合處也。於是舍彼之繁、求吾之約。惟在靜坐。久之、然後見吾此心之體、隱然呈露、常若有物。日用間種種應酬、隨吾所欲、如馬之御銜勒也。體認物理、稽諸聖訓、各有頭緒來歷、如水之有源委也。於是渙然自信曰、作聖之功、其在茲乎。有學於僕者、輒教之靜坐。蓋以吾所經歷、粗有實效者告之。非務爲高虛以誤人也。(白沙子全集卷二)

この「靜坐」をどのようにして「自得」したであろうか。右の文によれば、陳白沙は吳興弼の所を去り、白沙里に歸るや、門を閉じて出でず、専ら修行の方法を求めた。そのため師友關係を斷ち、ただ書物によつてこれを探ねた。寢食を忘れてこのようにすること數年、遂に得ることができなかった。それは「心」と「理」とが湊泊、脗合しないのである。そこで讀書を捨て、わが心に求めた。それが「靜坐」であつた。これをしばらくすると、「心」の本體がどこになくはつきりとし、いつもあることを意識するようであつた。これが「靜坐」の「自得」である。したがつて「靜坐」をもつて人に教えた。

先生教人、其初必令靜坐、以養其善端。嘗曰、人所以學者、欲聞道也。求之書籍而弗得、則求之吾心可也。惡累於外哉。此事定要觀破。若觀不破、雖日從事於學、亦爲人耳。……先生所以教人、即先生所以自得。(明故翰林院檢討白沙先生墓碣銘、南川

冰蘗全集卷六)

人が勉強するわけは、「道」を聞こうとするからである。よつて

これを書物に求めて得ることができない時は、自分の「心」に求めるのがよい。どうして外をわずらわすことがあるうか。これを自分の心に求める方法が、すなわち「靜坐」である。

陳白沙は「心」はすなわち「理」であり、「理」は一切を包括するものとなした。それは「靜坐」によって、ただ「心」を收拾するのみである。これができれば、天地は我より立ち、萬代は我より出で、宇宙は我にある。往古來今、四方上下、すべて一さい、「心」をしっかりと取り持つていれば、充塞しないことはない。

終日乾乾、只是收拾此而已。此理干涉至大、無内外、無終始、無一處不到、無一息不運。會此、則天地我立、萬化我出、而宇宙我矣。得此欄柄入手、更有何事。往古來今、四方上下、都一齋穿紐、一齋收拾、隨時隨處、無不是這個充塞、色色信他本來、何用爾脚勞手攘。舞雩三三兩兩、正在勿忘勿助之間。曾點些兒活計、被孟子一口打拚出來、便都是鳶飛魚躍。(與林郡博、白沙子全集卷二頁七九)

この陳白沙の説は、陸象山の「宇宙便是吾心、吾心即是宇宙。」(陸象山全集卷二二頁八)、「人心至靈、此理至明。人皆有是心、心皆具是理。」(同上頁九)、「先立乎其大者。」(同上卷三四頁八)と相符合する。

陳白沙は人に教える場合、時には明白に説明せず、その人が自ら悟るのを待っていた。それはちょうど、禪宗の自己領悟に似ている。凡天地間、耳目所聞見、古今上下載籍所存、無所不語。所未語者、此心通塞往來之機、生生化化之妙、非見聞所及。將以待世、卿深思而自得之、非敢有愛於言也。……予所未言者、世郷終當自得之。世卿之或出或處、顯晦用舍、則繫於所遇、非予所能知

也。(送李世卿還嘉魚序、白沙子全集卷一頁一五)

右の文は、李世卿に對して「自得」を教えた一節である。

この「自得」は湛甘泉に傳わり、さらに王陽明が傳承した。

二、王陽明の「自得」

王陽明は三十四歳の時、はじめて湛甘泉に出會つて以來、五十七歳で没するまで、二十數年間交友した。甘泉はまさに半生の親友である。

武宗の正徳五年(一五〇〇)、陽明三十九歳の十一月、入京して大興隆寺に宿つた時、岳舅黃綰が儲柴墟の取り次ぎで、王陽明に會い、明日、陽明のはからいで湛甘泉に會つた。そこで三人は終身學を共にすることを誓つた。

先生入京、館於大興隆寺。時黃綰爲後軍都督府事。因儲柴墟、請見。先生與之語喜曰、此學久絕。子何所聞。對曰、雖粗有志、實未用功。先生曰、人惟患無志、不無功。明日引見甘泉、訂與終日(注一)共學。(王文成公全集卷三二「年譜」一頁一七)

注一 終日——黃綰の「陽明先生行狀」には「終身」とある。

内容上この方がよい。「曾識湛原明否。來日請會、以訂我三人終身共學之盟。(陽明先生行狀)」

この三十九歳の十一月から、四十一歳の三月、湛甘泉が安南に使用するまで、約一年五か月、三人は北京で共同生活をし、聖學の倡明に努めた。

三人の結束はまことに固かった。それは人事にまで及んでいる。陽明はこの年の十二月、南京刑部四川清吏司主事を命ぜられた。ところが甘泉は黃綰と謀り、時の冢宰楊一清に、陽明を北京に留まら

せるよう諸願した。この願いが入れられ、四十歳の正月、吏部驗封吏司主事に改留され、職事の暇、初めて學を衆に講じた。

三人の共同生活が文字通り切磋琢磨、飲食起居を共にしたことは、次の記録によって立證される。

(7) 方期各相砥切、飲食啓處必共之。(王文成公全書卷三「年譜」頁二一)

(イ) 予三人者、自職事之外、稍暇必會講、飲食啓居、日必共之、各相砥勵。(陽明先生行狀)

(ロ) 陽明公謂甘泉子曰、乃今可卜鄰矣。遂就甘泉子長安灰廠右鄰居之。時講于大興隆寺、而久庵黃公宗賢會焉。三人相權語合意。久庵曰、他日天臺鴈蕩、當爲二公作兩草亭矣。後合兩爲一焉、明道一也。(陽明先生墓誌銘)

この生活が王陽明に與えた影響は大きい。王陽明は五十歳の正月、「致良知說」を公にしたが、その發想は、すでにこの時期にあったと思われる。

それは、陽明が四十一歳の十二月、南京太僕寺少卿に昇進し、赴任の途上、郷里越(會稽)に立ち寄る際、たまたま愛弟子徐愛も南京工部員外郎に昇り、陽明と舟を同じくして越に向かった。その舟中、「大學」の宗旨を論じ、「致良知」に及んでいる。

又曰、知是心之本體、心自然會知。見父自然知孝、見兄自然知弟、見孺子入井自然知惻隱。此便是良知、不假外求。若良知之發、更無私意障礙、即所謂充其惻隱之心、而仁不可勝用矣。然在常人、不能無私意障礙。所以須用致知格物之功、勝私復理。即心之良知、更無障礙、得以充塞流行、便是致良知。知致則意誠。

(王文成公全書卷一「傳習錄上」頁九)

知は心の本體であつて、心は自然に知覺することが出来る。父を見れば自然に孝行する氣持になるように。この自然の知の働きこそ良知であつて、人は誰でも生まれながらに持つており、外部に求めるものではない。この心の良知に全く妨げがなく、それを充實し、自由に發現することができたなら、これが「致良知」なのである。

この「致良知」の考えは、晩年における「致良知說」の根本となつた。

正徳七年(五三)、王陽明四十一歳の三月、湛甘泉は安南に使した。まさに出發しようとした時、陽明は聖學の明らかにし難く感い易く、人生の別れ易く會い難きを憂え、「別湛甘泉序」を書いて贈り、惜別の情を切切と吐露している。

顏子沒而聖人之學亡。曾子唯一貫之旨、傳之孟軻。終又二千余年、而周程續。自是而後、……聖人不得見之矣。……某幼不聞學。陷溺於邪僻者二十年、而始究心於老釋。賴天之靈、因有所覺、始乃沿周程之說求之、而若有得焉。顧二同志之外、莫予翼也。岌々乎仆而復興。晚得友於甘泉湛子、而後吾之志益堅、毅然若不可遏。則予之資於甘泉多矣。甘泉之學、務求自得者也。世未之能知、其知者、且疑其爲禪。誠禪也、吾猶未得而見。而況其所志卓爾若此。則如甘泉者、非聖人之徒歟。……吾與甘泉友、意之所存、不言而會、論之所及、不約而同。期於斯道、斃而後已者。今日之別、吾容無言。夫惟聖人之學、難明而易惑。習俗之降、愈下而益不可回。任重道遠。雖已無俟於言、顧復於吾心、若有不容已。則甘泉亦豈以予言爲緩手。(王文成公全書卷七「別湛甘泉序」頁六八)

自分は晩にして甘泉に會い、その志がますます堅くなった。今日

あるは甘泉に負うところが多い。甘泉の學は務めて「自得」を求めるものである。聖人の見ない今日、甘泉こそ聖人の徒ではないか。自分と甘泉とは言わず語らずして意思が相通する。二人は斯の道において、斃れて後已むを期すものである。今日の別れにはじゆうぶん意を盡せないが、甘泉はそれを諒とするであらう。

この序にあるように、王陽明が湛甘泉の學問を、務めて「自得」を求めるものであると「自得」したことが、窮極の學說である「致良知說」を生む動因となつたのである。「別湛甘泉序」を書いて贈つたのが、陽明四十一歳の三月であり、徐愛に「致良知」を説いたのが、同年の十二月であるのを思えば、自ら理解される。

陳白沙の教えを受けた湛甘泉は、「隨處體認天理。」の說を打ち立てた。これが甘泉の「自得」である。

それではどうして、このような說を立てるに至つたのであらうか。湛甘泉は陳白沙の「靜坐」を繼承しながらも、決してそれに心酔しなかつた。陳白沙のように、書を放つて「靜坐」に専念することを潔しとせず、「讀書」と「靜坐」の支離すべからざることを力説した。

諸生讀書時、須調鍊此心、正其心、平其氣、如以鏡照物而鏡不動、常炯炯地。是謂以我觀書。方能心與書合一。孔子所謂執事敬。中庸所謂合内外之道。程子所謂即是學。如此、方望有進。若以讀書主敬爲兩事、彼此相妨。別求置書冊而靜坐以爲學、便是支離、終難湊泊。(甘泉文集卷六頁一一「大科訓規」)

さらに湛甘泉は「靜坐」の禪に近づくのを嫌い、「靜坐」を主張せず「敬」を主張した。このことは、陳白沙の學よりはいい、後年、宋儒周程の學に傾いていったことを物語っている。

舍書冊、棄人事而習靜、即是禪學。窮年卒歲、決無有熟之理。如欲鐵之精、不就爐鑪、安可望精。(甘泉文集卷六頁一二「大科訓規」)

また、余嘗學に手紙を出して、次のようにいつている。

古之論學、未有以靜坐爲言者。而程氏言之、非其定論。乃欲補小學之缺、急時弊也。後之儒者、遂以靜坐求之、過矣。古之論學、未有以靜爲言者。以靜爲言者、皆禪也。故孔門之教、皆欲事上求仁、動時着力。何者、靜不可以致力。纔致力即已非靜矣。故論語曰、執事敬。易曰、敬以直内、義以方外。中庸戒愼恐懼、皆動以致其力之方也。何者、靜不可見。苟求之靜焉、駸駸乎入於荒忽寂滅之中、而不可入堯舜之道矣。故易曰、復其見天地之心乎。復也者、一陽動也。非復、則天地之心不可得而見矣。天地之心不可得而見、則天理或幾乎息矣。故善學者必令動靜一於敬。敬立而動靜混矣。此合内外之道也。性之德也。(甘泉文集卷七頁六〇七)

書物を含き、人事を捨て「靜坐」を習うのは、禪學である。古の學を論ずる者で、「靜坐」をもつていう者はまだいない。「靜坐」をもつていう者は皆禪である。ゆえによく學ぶ者は、必ず動靜を「敬」にいらしめる。「敬」が立つて動靜が融合する。これは内外を合する道であり、人間生まれながらに持っている性の徳である。

それでは「敬」とは何であらう。湛甘泉が聶文蔚にあてた手紙の中に、次のようにいつている。

人與天地萬物一體。宇宙即與人不是一物。故少不得也云敬者、心在於是而不放之謂。此恐未盡。蓋程子云主一之謂敬。主一者心中無有一物也。故云一。若有一物、則二矣。故孟子曰、心勿

忘勿助。長。勿忘勿助之間、乃是一。今云心在於是而不放、謂之勿忘、則可矣。恐不能不滯於此事、則不能不助也。可謂之敬乎。敬合始終内外之說最妙。(甘泉文集卷七頁二九、三〇「答薛文蔚侍御」)

また、黃孟善に答えた手紙にも、

敬字宋儒之論詳矣。惟明道主一之言至當。所謂主一者、心本無一物。若有一物、即非一矣。又恐人以主一爲滯着於物。故又加之、云無適之謂。一若了悟主一之旨、即不消云無適矣。若以主一無適、兼言敬字、不免重贅也。(甘泉文集卷七頁三七「答黃孟善」)

といっている。

「敬」とは「主一」であり「一」である。心に「一物」のないことと、もし「一物」があれば「主一」でなく、また「敬」ではない。それは「勿忘勿助」である。心が「主一」である時、すなわち「敬」である時、「天理」が現われる。

「一」とは何であらう。甘泉は「無欲」であるという。弟子の葛澗が「敬」について湛甘泉に質問した時、

敬者一也。一者無欲也。(甘泉文集卷三頁二「雍語」)

と答えた。「無欲」は心に「一物」もないことと相通じる。したがって「敬」である。

王陽明が湛甘泉の學を「務求自得也。」と悟ったのは、黃綰と三人で、北京で共同生活をしていた時であると考ええる。

王陽明も初めは「靜坐」をもつて修行とした。これは湛甘泉からの影響である。陽明は三十四歳の時、はじめて湛甘泉に會い、三十五歳の二月、封事を奉り、詔獄に下たり、龍場驛の驛丞に貶謫され

た。それは、時あたかも武宗の初政に當たり、宦官劉瑾が帝の寵愛を一身に受け、政權を壟斷していた。これを見かねた南京給事中戴銑・薄彦徽らが、諫言したところ、旨意に逆え詔獄された。そこで陽明が疏を奉つて救おうとしたためである。

三十六歳、謫に赴き、三十七歳の春、龍場に着く。龍場は貴州省の西北萬山叢棘中にある。ここで蛇虺蝎蠃、蝱毒瘴癘と共に生活をした。夷人はことばが違って通じず、通じる者は皆中國からの亡命者であった。もとより住居はなく、陽明ははじめて土人に、土を築き木を架け、家を作って住むことを教えた。ここに村長然と驛丞の任に就いた陽明の心中は、果たしてどうであつたらう。人間、得失榮辱の念を捨てなければ、到底生活し得ないところである。

陽明はすでに、この念から脱却していた。しかし當時、劉瑾の憾はまだやまず、どこに禍機の伏在するかも計り知れない状態であつた。陽明は自ら考えたあげく、得失榮辱の念は皆よく脱却したが、ただ生死の一念だけはなおまだ融化しないことを思い、石槨を作つてその中にはいり、「吾惟俟命而已。」(王文成公全書卷三二頁一三「年譜一」)と誓つた。

日夜端居澹默して、いちずに「靜一」を求めた。こうして長いこと續けると、胸中が灑然となり、一點の曇りもなくなった。かくして遂に生死も脱却することができた。

時に從者は皆病氣で臥してしまつた。陽明は自ら薪を折り水を汲み、かゆを作つて食べさせた。また一方、抑鬱を懷くことを心配し、そこで一緒に詩を吟じた。それでも喜ばないときは、さらに越曲を歌い、滑稽笑談を交えた。そこで始めて、その疾病夷狄患難を忘れさせることができた。思うに、主従が九死の底にあって、かくも和

氣識々たるは、陽明が生死を脱却した賜である。

されどこれは陽明の大悟ではない。陽明はさらに煩悶した。得失榮辱生死の脱却は消極的悟りである。この世に生を受けた以上、何を人生のより所として生きて行くべきか、この積極的悟りを求めることに、日夜工夫を凝らした。そこで閃光の如く脳裡をかすめたのは、「聖人處此、更何道。」（同全書卷三三頁一三「年譜一」）ということであった。

まことに平凡なことばである。しかしこの中には、萬代不易の眞理が宿されている。こういう今の場合、聖人がいたらどういうことをするであろうか。聖人だつて自分がやっているようなこと以外には、なすべき道がないではないか。そうだとすれば、今自分は聖人の道をやっているのだ。かくして夜半、急に「格物致知」の本旨を大悟したのである。

以上は、陽明が「格物致知説」を打ち立てるに至つた大要であるが、その導因となつたのは、生死を脱却しようとして石槨の中にはいり、「靜坐」をしたことにあると考える。これは湛甘泉との交友によつて得た賜で、もし湛甘泉に會わなかつたら、こうした修行はなかつたかも知れない。「出會い」の尊さと「交友」の影響力に、ただただ心を打たれる。

陽明は三十八歳の時、初めて「知行合一説」を論じた。そして正徳五年（五三〇）、三十九歳の年、赦されて廬陵縣知縣に昇進し、三月赴任した。

その途上、常德、辰州を過ぎ、門人冀元享・蔣信・劉觀時の輩を見て、皆立派に成長したことを喜び、次のようにいった。

謫居兩年、無可與語者。歸途乃幸得諸友、悔昔在貴陽舉知行合

一之教、紛紛異同、罔知所入。玆來乃與諸生、靜坐、僧、寺、使自悟性體、顧恍恍若有可即者。（同全書卷三三頁一六「年譜一」）これによれば、貴州で論じた「知行合一説」が、まだじゅうぶん熟さないため、門人冀元享らと寺僧に「靜坐」し、その結果、悟るところがあつたのである。

かくして陽明は、この年の十一月入観し、十二月に南京刑部四川清吏司主事に昇進したが、僅か一か月で、翌正徳六年（五三二）正月には、吏部驗封清吏司主事となり北京に歸つた。これは湛甘泉と黃綰の推舉であつたことは、既に追へた通りである。

これ以來、三人は再び北京で共同生活をした。そして湛甘泉が安南に使用するまで、通算約一年五か月であつたことも既述した。

この三人の共同生活については、何の資料もないのは、まことに残念の極みであるが、王陽明はこの間に、湛甘泉の人柄や學説を、暗黙裡の中に悟認し、それが甘泉の安南に使用するに當たり、「別湛甘泉序」を作り、甘泉の學は「務求自得者也。」のことばとなつて、口を突いたのであらう。

三、王陽明の子弟教育

王陽明の子弟教育は、やはり「自得」の一語に盡きる。「年譜」と「傳習錄」から、おもなるものをあげてみよう。

1 年譜

(ア) 先生自南都（註一）以來、凡示學者、皆令存天理、去人欲、以爲本、有問所謂、則令自求之、未嘗指天理爲何如也。問語友人曰、近欲發揮此、只覺有一言發不出、津津然如含諸口、莫能相度。

（王文成公全書卷三三頁三四「年譜二」）

王陽明は正徳九年、(五十四)四月、四十三歳の年、南京鴻臚寺卿に昇り、五月着任した。それ以來、學者に「存天理去人欲。」をもつて修行の根本とした。

この「存天理去人欲。」の語が、初めて「傳習錄」に見えるのは、正徳七年(五三)陽明四十一歳の十二月、南京太僕寺少卿となり、滁州(安徽省)に赴任する途上、郷里越(會稽)に立ち寄る際、愛弟子徐愛も南京工部員外郎となつて、舟を同じうし、その舟中で「大學」の宗旨を論じた時である。

聖人述六經、只是要正人心、只是要存天理、去人欲。於存天理去人欲之事、則嘗言之。或因人請問、各隨分量而說、亦不肯多道。恐人專求之言語。故曰、予欲無言。(王文成公全書卷一頁一三

「傳習錄上」)

孔子が六經を祖述したのは、ただ人心を正さんがためで、人々に天理を保持し人欲を去るようになるのが目的であつた。天理を保持し人欲を去ることについては、孔子もかつて人に説明したことがある。しかしそれは、人の質問により、また人のおおのの力量に應じて説明したので、余り多言しなかつた。人が單にことばの上だけで求めようとするのを恐れたからである。だから『私は何も言いたくない。』といつてゐるほどである。

この「存天理去人欲。」の語は、王陽明の發案であるが、その發想は、朱子が「大學」の三綱領のひとつである「至善」を解くに用いた「盡夫天理之極而無一毫人欲之私。」のことによる。

このときはまだ、「存天理去人欲。」を修行の根本とは考えず、やはり「靜坐」を主なるものとしていた。それが南京へ來て以來、修

行の根本としたのは、次の理由による。

自徐愛來南都、同志日親、黃宗明・薛侃・馬明衡・陸澄・李本・許相卿・王激・諸僎・林達・張賓・唐愈賢・饒文璧・劉觀時・鄭驥・周積・郭慶・樂惠・劉曉・何麓・陳傑・楊杓・白說・彭一之・朱僊輩、同聚師門、日夕漬礪不懈。客有道、自滁游學之士、多放言高論、亦有漸背師教者。先生曰、吾年來欲懲末俗之卑汚、引援學者、多就高明一路。以救時弊。今見學者漸有流入空虛、爲脫落新奇之論。吾已悔之矣。故南談論學、只教學者存天理去人欲、爲省察克治實功。(全書「年譜一」頁二六)

徐愛が南京に來てより、同志日に親しく、黃宗明・薛侃・馬明衡・陸澄ら、數十人が王陽明の所に集まり、朝夕切磋琢磨を怠らなかつた。しかし中には何かと不平をいう者があつた。滁州から遊學した士は、放言高論する者が多く、また漸く陽明の教にそむく者も出た。陽明はそこで、學者が空虛に流入し、「心即理說」「知行合一說」から脫落するのを悔い、「存天理去人欲。」を唱えたのである。既に述べたように、陽明は初め、子弟に「靜坐」を勧めた。しかし「靜坐」は動を避け靜を好み、枯槁空寂に流れ、儒家の本體を忘れる傾向になつた。そこで、これを救う方便として「事上磨鍊」を説き出した。それは正徳八年(五三)十月、王陽明が四十二歳の時から、同九年三月まで滁州にいたときである。「存天理去人欲」を説いたのはその後である。

一友靜坐有見。馳問先生。答曰、吾昔居滁時、見諸生多務知解口耳異同、無益於得、姑教之靜坐。一時窺見光景、頗收近效。久之漸有喜靜厭動、流入枯槁之病。或務爲玄解妙覺、動人聽聞。故邇來只說致良知。良知明白、隨你去靜處體悟也好、隨你去事

上磨鍊也好。」(王文成公全書卷三頁二三「傳習錄下」)

王陽明は、この「存天理去人欲。」を弟子たちに「自得」させた。だから決して「天理」の意味を説明したことはなかった。

(イ) 富利卑隘、至不能容。蓋環坐而聽者三百餘人。先生臨之、只發大學萬物同體之旨、使人各求本性、致極良知、以止於至善。功夫有得、則因方設教。故人悅其易從。(全書卷三四頁一〇「年譜三」)

嘉靖三年(一五二四)正月、陽明五十三歳の時、稽山書院を開き、八方からすぐれた男子を集め、身をもって講習し監督した。そこで楊仕鳴・王良・孟源・周衝・魏良政・魏良器ら三百餘人が集まった。家がいつばいであふれ、弟子たちは環坐して講義を聞いた。陽明はただ「大學」の萬物同體の本旨をいうだけで、あとは各人の修行にまかせた。すなわち「自得」させたのである。このようにして修行に得るところがあると、そこではじめて人それぞれに應じた方法で、教へ導いた。だから人々は従い易いことを喜んだ。

2 傳習錄

(ア) 吾儕於先生之言、苟徒入耳出口不體、諸身則愛之錄此、實先生之罪人矣。(王文成公全書卷目頁二「傳習錄序」)

(イ) 道之全體、聖人亦難以語人。須是學、自修、自悟。(全書卷一頁三六「傳習錄上」)

(ウ) 德洪曰、昔、南元善刻傳習錄於越。凡二冊。下冊摘錄先師手書、凡八篇。其答徐成之二書、吾師自謂天下是朱非陸、論定既久、一旦反之爲難。一書姑爲調停兩可之說、使人自思得之。

(全書卷二頁一「傳習錄中」)

(エ) 目視、耳聽、手持、足行、以濟一身之用。目不恥其無聰、而

耳之所涉、目必營焉、足不恥其無執、而手之所探、足必前焉。蓋其元氣充周、血脈條暢。是以痒癢呼吸、感觸神應、有不言而喻之妙。(全書卷二頁二四「傳習錄中」)

(ウ) 先生又論盡心一章。九川一聞、卻遂無疑。後家居、復以格物遺質。先生答云、但能實地用功、久當自釋。山間乃自錄大學舊

本讀之、覺朱子格物之說非是。(全書卷三頁「傳習錄下」)

(エ) 崇一日、先生致知之旨、發盡精蘊。看來這裏再去不得。先生曰、何言之易也。再用功半年、看如何。又用功一年。看如何。

功夫愈久、愈覺不同。此難口說。(全書卷三頁六「傳習錄下」)

(オ) 諸君只要常常懷箇通世無悶、不見是而無悶之心。依此良知、忍耐做去、不管人非笑、不管人毀謗、不管人榮辱。任他功夫有進有退、我只是這致良知的主宰不息、久久自然得力處。一切外事、亦自能不動。(全書卷三頁一七「傳習錄下」)

(カ) 一友問功夫不切。先生曰、學問功夫、我已曾一句道盡。如何、今日轉說轉遠、都不著根。對曰、致良知蓋聞教矣。然亦須講明。先生曰、既知致良知、又何可講明。良知本是明白。實落用功便是。不肯用功、只在語言上、轉說轉糊塗。曰、正求講明致之之功。先生曰、此亦須你自家求。我亦無別法可道。(全書卷三頁二九「傳習錄下」)

(キ) 先生曰、用功到精處、愈著不得言語。說理愈難。若著意在精微上、全體功夫反蔽泥了。(全書卷三頁三九「傳習錄下」)

以上、「傳習錄」から「自得」に關する文章を九か條あげたが、條ごとに簡単な説明を加えよう。

(ア) 愛弟子徐愛が「傳習錄序」を作り、その終わりのほうに述べている語である。私たちが先生のことばを、かりそめにも耳から入

れ口から出すだけで、自分の身に實際に體認しなければ、私の筆録は先生に對して、大きな罪を犯すことになる。徐愛が「不體諸身」といつていることは、自らの修行によって「自得」することを示したものである。

(イ) 門人陸澄との問答における陽明の答えである。陽明は常に、孔子顔回がなくなつてからは、聖人の學は亡んだといわれていた。それに對して、陸澄が疑問を抱き、顔回以後も子思や孟子その他の賢人が出て、聖學は亡んでいないことを質問した。陽明はこれに答えて、「聖人孔子の教えの全體を見て、これを把握し得たのは顔回だけである。それは顔回が孔子の偉大さを、喟然として嘆じた論語『子罕編』の一章の語をよく見ればわかる。その中に顔回が『孔夫子は弟子の能力に應じて順序よく教え導かれ、われわれの知識を広げるに學問をもつてし、われわれの行ないを引き締めるのに禮をもつてした。』といつておられるのは、顔回が孔子の教えの眞精神を見破つて後の語に外ならない。この博文約禮が、どうして人をよく教え導くものであるか、學問するものはじゆうぶん考えなければならぬ。道の全體については、聖人でも人に説き知らせることはむずかしい。だから學ぶもの自身が自分で修行して悟らなければならぬ。顔回が『孔子の後について行こうと思つても、その方法がない。』といつて、孔子を近寄り難く、捕え難い偉大な人格者と見て嘆じたことは、顔回が本當に孔子を知つたことを表わすものである。それゆゑ私は、顔回が没して以後は、聖人の教える正しい學問の系統は亡んで傳わらないというのである。」と。王陽明のいわれる「自修自悟」は、顔回を例にあけて、弟子に「自得」を教えたものである。

(ウ) 「傳習錄」(中)における錢德洪の序の最初の部分である。「以前、南元善が『傳習錄』を浙江で出版したことがあつたが、それは二冊本で、下巻は先師陽明先生の手紙八編から抜き書きしたものである。その中の徐成之に答えた一通については、先生自身も『世間では朱子を正しいとし、陸象山を否とする論が決定的となつてから、すでに長いこと經つているので、今急にこれを正しい姿に返すことはむずかしい。それで二通の手紙ではしばらく妥協的に、兩者とも可であるというような曖昧なことをいつて、讀むものが自分で考え悟るようにした。』といつておられる。元善がこれを下巻の冒頭に載せたのも、多分そのためであらう。」と。「自思得之」の語は、この場合、本來の「自得」の意味からやや離れている感じがしないでもないが、陽明が常日ごろ「自得」を弟子たちに説いていた結果、こうしたことばで弟子の口から出たのではあるまいか。

(エ) 王陽明が五十四歳の時、顧東橋に答えた手紙の一節である。この手紙で陽明は「萬物一體論」を顧東橋に論述した。これこそは「致良知」の極地である。人は各自、自己の本分を盡しながら、他人の才能を認め合い、萬物を一體とする仁の心が完全に發現することが肝要で、それはちょうど、目耳手足がそれぞれの役目を果しているのと同じである。これは打てば響いて感應する、いわば口に出して言わなくとも、おのずと心に悟る靈妙な働きがあるからである。「有不言而喻之妙。」とは、「自得」に外ならない。

(オ) 正徳十年(五五)乙亥、陽明四十四歳の年、門人陳九川が、初めて王陽明に龍江で會つた。その時、陽明はちょうど湛甘泉と「格物」の解釋について議論していた。甘泉は朱子の舊説を持していたから、陽明は「理を外に求めるものだ。」といわれた。すると

甘泉は「もし物の理に至るのを外とするなら、それは自身で心を小なるものとするものである。」と反駁した。これを聞いて、九川は陽明の「格物説」の正しいことを、大いに喜んだ。したがって、後で陽明が孟子の盡心の首章を論じられた時は、不思議にも何の疑問も感じなかった。その後、致仕して家にいるようになってから、再び「格物」について手紙で陽明に質問したら、陽明は「但能實地用功、久當自釋。」と答えられた。「自釋」は「自得」である。

(功) 門人歐陽崇一が王陽明の「致良知説」に對して、「お説の主旨は、まことに精微蘊奥を極めたもので、この點をよく見ることができれば、二度と離れられないと思います。」といったのについて、陽明が「口でいうことは實にたやすいことだ。人間はもう半年間修行した後、どうであるかを見ることが必要であり、さらにもう一年修行したら、どうであるかを見るがよい。修行が長くなればなるほど、ますますその内容が違ってくるのがわかる。それは口では説明できない微妙さがある。」といわれた。「此難口説。」はすなわち「自得」と考えられる。

(中) 黃修易（勉叔）が王陽明との問答における陽明のことばである。「人間の修行には飛躍がなく、一足跳びに高いところへ行けるものではない。だから手を加えて無理に早く目的を達するようなことをしてはならない。途中には起伏險易があり、失敗もやむを得ない。よってそれをかくし體裁をつくる必要は全くない。もしそれをするれば、それこそ助長であって、今までの修行すら一舉に崩壊してしまう。それはちょうど、道路を歩いている人が、偶然つまずいて倒れ、それから起き上がったて歩き出すと同じことで、何もごまかし、倒れなかったふりをする必要はない。人間は易にある『世を離

れても煩悶せず。人に容れられなくても悶える心のない。』確固たる信念を持つことがたいせつである。人はこの良知を本にし忍耐してやっつけていき、他人の嘲笑・非難・罵倒・榮辱に拘わりなく、また修行に進歩があろうとなかろうとかまうことなく、ただ良知を致す修行をして怠らないなら、長い間には自然と底力を得、一切の外部の事象にもおのずと動搖しなくなるのである。」「久久自然、有得力處。」は修行した結果の「自得」である。

(夕) 黃省曾の記録である。ひとりの友人が、陽明の説かれる修行を行なってみても、一向に身につかないので、その理由を質問すると、陽明は、「學問修行については、私は前から『致良知』の一句でいい盡している。もしそれを説明するとなると、説けば説くほど遠く離れていつて、根本に觸れなくなるのを、どうすることもできない。」と答えられた。また、「良知は本來明白なものであるから、實際そこに力を入れさえすればよいのである。もしそうした努力をしないで、ただことばの上だけで説明しようとする、説けば説くほどわからなくなってくる。」「良知を致す實際の方法は、自分自身で求むべきことで、私にもこれといった良い方法はない。」といわれている。「轉說轉遠。」「轉說轉糊塗。」「須你自家求。我亦無別法可道。」の語は、まさに陽明の人生哲學である「自得」を、如實にいい表わしたものである。

(夕) これも黃省曾の記録である。陽明が、「修行も深いところへはいって行くと、ますますことばでは説明できなくなる。これは道理を説くことがいよいよむずかしくなるからである。もしあまり細かいところに心を使うと、全體の修行はかえって妨げられてくる。」「用功到精處、愈著不得言語。」はやはり「自得」をいったもので

ある。

四、結論

陳白沙の「自得」は「靜坐」であつた。すなわち「靜坐」によつて人生を體認した。この流れを受けた湛甘泉は、「靜坐」と「讀書」の支離すべからざることを力説し、「靜坐」の禪に近づくのを嫌い、「敬」を主張した。これが「隨處體認天理。」の説であり、甘泉の「自得」である。王陽明も初めは「靜坐」をもつて修行とした。「心即理説」や「知行合一説」はまさにそうである。しかし次第に「靜坐」の弊害を悟り、「事上磨練」から「存天理去人欲。」の修行に變わり、遂に「致良知説」を樹立するに至つた。これは湛甘泉との交友によつて得た「自得」が、王陽明の學説を止揚した結果である。

(都立青山高校教諭)